平成２９年度　第２回
東京都花粉症対策検討委員会

日時　平成３０年１月１８日（木）
　　１４：００～１５：２８
場所　東京都健康安全研究センター
　　本館６階会議室

午後２時００分　開会

１　開　　会

○秋場健康危機管理情報課長　それでは定刻となりましたので、ただいまから平成２９年度第２回東京都花粉症対策検討委員会を開催させていただきます。

議事に先立ちまして、東京都健康安全研究センター企画調整部長の室井より御挨拶申し上げます。

○室井企画調整部長　企画調整部長の室井でございます。本日は、大変お忙しい中、東京都花粉症対策検討委員会に御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

御案内のとおりかと思いますが、都では、平成２７年施行のアレルギー疾患対策基本法に基づきまして、花粉症を含めましたアレルギー対策をさらに進めていこうと考えているところでございます。今年度中にはアレルギー対策推進計画を策定する予定でございます。現在パブリックコメント中でございますが、ここの中にも花粉症について取り上げているということをまずは御報告をさせていただきたいと思います。

さて、１月も下旬を迎えまして、そろそろスギやヒノキの花粉が飛散をするという時期になってまいりました。昨春の花粉飛散数は前年に比べて約６割ということで少な目ということでございましたが、今春の予測につきましては、多いとするところと少ないとするところと予測が分かれておりまして、なかなか予測が難しいところなのかなと考えております。

東京都の予測につきましては、行政機関が出す情報ということもございますので、都民からも例年大変注目を浴びているところでございます。昨年秋以降、佐橋先生、横山先生、村山先生におかれましては、花芽や着花状況の調査、気象状況の分析などを行っていただきましたが、本日はこれらのデータ分析結果をもとにそれぞれの御専門の立場からの御意見をいただき、委員会としての御判断を頂戴したいと考えております。

なお、本日の結果は委員会終了後直ちにプレス発表をいたしまして、都民の皆様が花粉の予防や治療に適切に対応できますように広く情報提供をしていきたいと考えているところでございます。どうぞよろしく御審議のほどお願い申し上げます。

○秋場健康危機管理情報課長　申しおくれましたが、私、当センター健康危機管理情報課長の秋場と申します。議事に入りますまでの間、進行を務めさせていただきます。どうぞ

よろしくお願いいたします。

まず、配付資料の確認をさせていただきます。

本日の次第、名簿に続きまして、Ａ４、１枚の資料１、その後はいずれもホチキスどめで資料２～５までお手元にあるかと思いますが、不足等ございませんでしょうか。

それから、委員の先生方のお手元には「花粉症実態調査報告書」、こういった黄色い表紙の冊子と、それから「花粉症一口メモ」、こういったものも不足等ございませんでしょうか。

よろしければ、続きまして、委員の皆様の御紹介ですが、前回御欠席でしたお二方を御紹介させていただきます。

まず、当委員会の会長であります村田委員です。

○村田会長　村田でございます。前回は突然体調に不備を来しまして欠席をいたしました。皆様方には大変御心配やら御迷惑をおかけしたと思います。改めておわび申し上げたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

○秋場健康危機管理情報課長　続きまして、昨年８月に委員に就任されましたため、今回が初めての出席となります川上委員です。

○川上委員　東京都医師会の川上です。よろしくお願いいたします。

○秋場健康危機管理情報課長　その他の各委員におかれましては、前回御紹介しておりますので、お手元の名簿と座席表でこれにかえさせていただきます。

なお、髙橋委員は所用により御欠席という連絡をいただいております。

事務局の担当者につきましても、お手元の名簿と座席表で御確認いただければと思います。

それでは、ここから議事に入りますので、カメラを使っての取材はここまでとさせていただきます。

〔報道関係者　退席〕

○秋場健康危機管理情報課長　本日の資料、議事録は原則公開となりますので、御承知おきください。

では、議事の進行を村田会長にお願いいたします。村田会長、よろしくお願いいたします。

２　議　　事

（１）平成３０年春のスギ・ヒノキ花粉飛散予測

ア　花芽調査結果について

○村田会長　村田でございます。改めて今日はよろしくお願いをいたします。

本日は、今年の春のスギ・ヒノキ花粉の飛散の予測ということで行いますが、今までと同じようにいろいろ報告等を受けて、その後、一括してディスカッションしてまいりたいと思いますので、よろしくお願いをいたしたいと思います。

それでは、２、議事の（１）のア「花芽調査結果について」ということで、これは事務局より資料１について説明をしていただくということになっております。よろしくお願いいたします。

○小林健康危機管理情報課環境情報担当主任　事務局の小林でございます。私のほうから資料１の説明をさせていただきたいと思います。

平成２９年度花芽調査結果になります。こちらの調査ですが、調査日は平成２９年１１月２２日に実施しておりまして、佐橋委員、村山委員、横山委員に御協力いただいております。

調査地点ですが、こちらのほうに載っております７カ所の地点で調査を行っております。こちらの調査地点は昨年の調査と同じ調査地点でございます。

次、評価ですが、５段階評価ということで評価しておりまして、この評価の内容につきましては、この資料の一番下にあります判定基準が載っておりますので、こちらのほうを御参照ください。

各地点の評価の数値ですけれども、こちらは３委員の平均値を載せております。また、各地点でのコメントはこちらに載っておるとおりでございます。

全体の平均値ですが、今回の結果は３．０という結果になっております。昨年は２．８という結果でしたので、これに比べるとやや多いという結果が出ております。

資料１の説明に関しましては以上になります。

○村田会長　ありがとうございました。ただいま資料１「花芽調査結果」について説明を受けました。ただいまの説明について、何か御意見、御質問ございましたらどうぞ御発言いただきたいと思います。いかがでございますか。

後ほど３委員の御説明がございますけれども、それに関連したようなところがあるかと

思いますので、そのときにまたこの結果について御質問いただいてもよろしいと存じます。
――よろしゅうございますか、先に進ませていただいて。
　それでは、先に進ませていただきます。

イ　スギ雄花成長量などによる予測
ウ　スギ林の雄花着生状況調査による予測
エ　平成３０年度春の花粉予測

○村田会長　それでは、イ「スギ雄花成長量などによる予測」ということでございます。先ほど申し上げましたように、イ、ウ、エを御説明いだいた後、あわせて御質疑をお願いしたいと思います。
　それでは、佐橋委員より資料２の説明をお願いいたします。
○佐橋委員　佐橋です。御指名によりまして、資料２をごらんください。「スギ雄花成長量などによる予測」ということでお話しいたします。
　まず表１ですが、昨年２０１７年の調査結果とその前の年、２０１６年の調査結果をデータで比較しまして、平均をそれぞれ出しました。ここでは平均のところを見ていただきたいのですが、２０１６年、雄花の重さにつきましては２３．７ｍｇ、それから２０１７年が２７．１ｍｇということで、計算してみますと２０１７年のほうが１４％ぐらいの増加になっております、重かったわけです。次の雄花の大きさですけれども、こちらは２０１６年が６．４ｍｍ、１７年が６．６ｍｍで、わずか０．２ｍｍの大きさですけれども、計算してみますと３％の増加。唯一マイナスだったのが１房の長さでして、これは１６年が３ｃｍ、１７年が２．９ｃｍでしたので、－３％ぐらいの減少になったということです。次に１房当たりの雄花の数ですが、これは２０１６年が２８個、２０１７年が２９個でして、わずか１個ですけれども、全体としてみますと４％の増加ということです。
　２０１６年と比べて、昨年は全体的に見ますとやや良好であったということが言えるかと思います。これは先日の３名で行った奥多摩での目視による雄花の調査結果ですが、５段階中平均で３という数字になっておりますので、こちらでも前年よりも良好な値が出ていることを裏づけているかと思います。つまり、目視の状態と実際に雄花をとって測定した状態がほぼ合致したということになるかと思います。
　次に表２のほうですが過去３２年間、１９８６年からよくもこれだけ続いたと思うので

すが、一番下に３２年間の平均と、その上の黄色い部分で示したところは昨年のデータですが、後者と平均を比較してみますと、後者の重さは２７．１mg、平均が２４．１mg で計算してみますと１２％、平均よりもやはり増加しています。それから大きさのほうも３２年平均が６．３ｍｍ、昨年は６．６ｍｍですので５％の増加をしています。１房の長さのほうは平均が２．８ｃｍ、昨年が２．９ですので、こちらも４％の増加。雄花数も平均が２７で昨年が２９ですので、７％の増加ということで、過去３２年間と昨年と比較しましても良好な増加傾向は少な目ですけれども、あるということがわかるかと思います。

次に表３ですが、例年行っております雄花数と、翌年の総飛散数を過去のデータを用いて単純回帰ですけれども相関をとりますと、下のほうの欄外に示しましたように、千代田と八王子のみを計算をしておりますが、千代田は３，８７３個、八王子のほうは７，２７８個となります。相関も０．５ぐらいなので余りよいとは言えませんが、一応相関はあるかと思います。

これだけですとやや過去の平均と比べても少な目ですので、補正をしようと思いまして、その補正の理由としまして、４つほど挙げました。まず奥多摩の７地点のスギ雄花の５段階評価では平均３．０とやや昨年より高い評価が出ている。それから２番目に、関東南部のスギやヒノキの雄花着花量が平年よりも多目であるということ。３番目に千代田で過去４年間５，０００個を超える大飛散がないということ。つまりスギの木自体に余力があるのではないかと言うこと。それから４番目に八王子では過去４年間は過去３１年の平均飛散数を下回っているということですね。

そういうことも踏まえまして、下から２番目に書きましたけれども、以上の理由から①と②の予測値の２割増しとしまして、この２割増しの予測値にさらに±２５０個の幅を持たせて、千代田の予測値は最終的に４，４００～４，９００個、八王子の予測値は８，５００～９，０００個といたしました。

以上です。

○村田会長　ありがとうございました。

それでは、続きまして、ウの「スギ林の雄花着生状況調査による予測」ということで、これは横山委員より資料３の御説明をお願いいたします。

○横山委員　それでは、スギ林の雄花着生状況から花粉飛散数を予測するということについて御報告します。

今年からは林野庁の雄花のデータを使うということにいたしました。林野庁のスギ林雄

花調査というのは２００１年に１２の都府県で調査が始まっておりまして、現在では１７都府県で実施されております。調査対象のスギ林は１つの県当たり２０カ所が基本ですが、毎年同じスギ林を観察しております。

それから、表１がその結果ですが、スギ林を実際に観察する方法自体はこれまで独自に行っていた方法と同じです。スギ林を双眼鏡で観察して、１つのスギ林について４０本のスギの木の雄花の着生状態を判定して、それをもとに単位面積当たりの雄花数を推定するという方法です。花粉の予測には、２００８年～２０１７年までの１０年間のデータを使っております。関東４県と静岡県のデータだけを使っております。栃木と群馬の両県は観察始まってからまだ４年間ですので、この両県を除いてあります。

この表の裏の図１が２００８年～２０１７年までの関東７県と静岡県の雄花数の推定値の推移です。今年といいますか、２０１７年というのは特別な豊作年でもなく凶作年でもなかったわけですが、前年と比較しますと幾つか特徴があります。まず前年より雄花の数がふえたという県が東京都、千葉、神奈川、栃木、特に神奈川県が非常に前年の２倍強と大幅に増加しているのが目につくところです。逆に減少した県もありまして、群馬、茨城、埼玉、静岡が前年よりは減っておりますが、中でも静岡県が大幅に減少しております。それぞれ県ごとの特徴が出て、全体で同じように変化するという年ではなかったわけです。予測が当たりにくい年ではあると思います。

このデータを使って花粉飛散数を予測した結果が表３です。地点ごとの予測値は３，３００～１万２，１００個です。全体の１２地点の平均としては５，９００になるという、こういう結果でありました。

以上です。

○村田会長　ありがとうございました。

それでは、続きまして、エ「平成３０年春の花粉予測」ということで、村山委員より資料４の御説明をお願いいたします。

○村山委員　１枚めくっていただいて、昨年の夏の天候の状況から改めてお話ししたいと思います。

昨年は７月が記録的な猛暑で、８月は３週間連続で雨が降るという極端な天候になりましたけれども、一般の人は昨年の夏は冷夏というイメージが強いと思いますが、まず７月の天候を見ていただきますと、上段から気温、降水量、日照時間になっています。一番影響するのは日照時間ですが、７月の日照時間は関東地方周辺がかなり多くなりました。例

年の２０％から、一部４０％以上多いということです。気温のほうも高いし、雨も少ないということで、スギ・ヒノキの雄花ができる条件というのはかなりよくなっています。一方８月は、８月の平均気温は関東地方から北では平年よりやや低い。ややといってもこれは１℃以上低いわけではありません。雨は少ないです。それから日照時間は平年の６割程度ということで、この８月のイメージが強くて冷夏というイメージになるのですが、一番下の図が６月～８月、これ気象庁は６月～８月を夏として統計をとっております。

これで見ていただくと、上段の気温は、夏は平年よりやや高いということです。それから降水量は少ない。それから日照時間は関東地方の北部、これは茨城県もかかっているのですが、ここでやや少ないほかは日照時間が多いということで、スギ・ヒノキの雄花ができる条件は実はそろっています。気象条件的には多くなると。ただ、前年が多いと翌年少なるというのは何度も横山委員のほうから話があったものです。

それで、一覧表にしています。次のページですが、表１が６月、７月、８月の平均気温と、東京に関してはその下に平年差を置いております。これ日照時間を見ていただきますと、６月、７月が多くて８月が少ないと。半分ぐらいになっているのですけれども、基本的にはスギの雄花は８月になってからできるものではなくて、もう６月末から７月にできてしまっているので、数的には８月の気象というのは余り影響していないと。８月がちょっと日照不足だったので成長はいつもの年より秋にかけて少しおくれたようですけれども、基本的な雄花の数はその前のもので決まっているということです。

もう１つが関東地方と、群馬と栃木は年数が少ないので省いてありますが、静岡を含めた１都５県ですが、見ていただきますと大体東京の周辺が前年比で２倍を超えています。関東北部は少ないといっても前年の９０％、それから過去１０年間の平均との比率で見ると関東地方の千葉、東京、神奈川が１．４倍～２．０倍というところです。静岡は昨年の４割なのですが、過去１０年の平均と同じということで、静岡が特に減ったというわけではありません。

それで、まず、ちょっと表が長くて申しわけないのですが、表３ですが、左から平成２９年の実測と、次の升が平成３０年の予測１と書いてあります。この予測１というのは気象条件と前年の花粉数、これから計算したもので、この結果は千代田が４，９００弱、八王子が６，３００弱ということで、全体の平均が５，０００個程度になります。前年比、平均比ときまして、左から６つ目のところですね、平成３０年予測２というのが雄花の観察状況を加えた式です。これは関東地方全体の平均ではなくて、それぞれの県に重みをつ

けているので、東京に近いところが雄花の観察数が大きくなるとどうしても大きくなるので、ほかの委員よりもここでは多目の予想になっています。こちらでいうと都内の平均値が６，７００弱、千代田で５，８００、八王子で８，８７４ということになります。こちらのほうだと前年比で１．２７倍～３．１倍、平均比でも１．０２倍～１．４４倍ということになります。

このそれぞれに対して、例えば予測の１だった場合、予測の２だった場合、３０個以上飛ぶ日がどのくらいあるかといったのが右の２つの欄になります。こちらのほうは個数が相当増えてもそれほど変化がなくて、予測１で都内全域が３６日、予測２で４１日と５日しか変わりありませんけれども、いずれにしてもかなり長期間にわたって花粉が多いというのが続くという予想になります。

次が、今度は飛散開始日のほうですが、スギの雄花は１１月の半ばぐらい、そのころから休眠に入って、１２月の末まで、下旬の半ばまで通常は休眠しています。過去の研究では、この休眠期間の気温が低いと休眠から覚める休眠打破が起きるのが早くなるということなので、図４には１１月１５日から４週間の天候をやっていますが、これは全国的に気温が低いですね。このため、休眠に入るのが早くて休眠から打破されるのも早いだろうと。図５は１２月中旬以降の気温の予測ですが、実際にはこんなに低くなりませんでした。とりあえず２０日の分まで予測値を入れて、１８、１９、２０のこの３日間の予測値を入れて計算すると、１月１日～２０日までの気温は、関東地方は平年より０．２℃ほど高い、ほぼ平年並みという形になっています。

この後どうなるかというと、ここに平成３０年１月の気温予想と書いてありますが、このとおりで大体平年並みに落ち着きそうだということですが、月末にかなり強い寒気が南下して３日ぐらい気温が下がりますけれども、今日、明日、明後日の気温が高いのと、それから月末に気温が低い前後というのが平年よりやや高いということで、１月トータルとしてはほぼ平年並みになるだろうと。それから２月は図７にあるように、関東地方はほぼ平年並みに推移するという予想になっています。そうすると、１月～２月の気温は平年並みですから開花に与える影響は割合小さいのですけれども、１１月～１２月の気温が低いということで、例年より少し早くなるだろうという予想になります。ただ、最も影響するのが１月の末から２月の上旬の気温なので、ここの予想が外れてしまうと多少ずれる可能性があります。

それで、次の表４というのが今年の春の予測の開始日です。前年は２月１１日～１６日、

５日ぐらいのばらつきがありましたけれども、現在の予測では２月１０日から、一番遅いところで２月１４日。過去の平均に比べると３日～５日ほど早いという予想になっています。例年が大体バレンタインの前後とよく言われるのですが、このバレンタインの前後というのは東京の都心が２月１４日というだけで、ほかは１４日～１９日になりますが、それに比べると少し早いという予想になっております。今の気温の傾向から言うと早くなるだろうなと。

もう１つは雄花の数が多い、それから予想される花粉数が多いときには実際にここから計算されるよりも少し早目になるのでその分も入れてありますので、２月１０日過ぎには飛散の始まるところがあると、そういう予測になっています。

以上です。

○村田会長　ありがとうございました。

ただいま３名の委員の方から予測についての説明がございました。これらの予測に関しまして御意見、御質問をお伺いしたいと思います。どうぞ活発な御発言をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。いかがでございますか。

○弘岡委員　小さなことだと思うのですけれども、佐橋先生、１番の都立小峰公園を抜かしているのは何か理由があるのでしょうか。２から７はやって、１は入っていないのですけれども。

○佐橋委員　小峰公園は、もうだいぶ以前から木が生長して手に届くところで花芽がとれないのですね。それで、ここ何年かは目視だけで実際の測定はしておりませんので抜かしてあります。

○村田会長　以下、よろしいですか。ほかに何か。

○弘岡委員　もう１つ、資料３－３の横山先生だと思うのですけれども、表１ですが、東京と神奈川が前年と比べて非常に増えていて、静岡は前年と比べて非常に少なくなって、極端にそういう違う測定値ですけれども、これは村山先生の関係で気象なのでしょうか、何でしょうか。

○横山委員　おっしゃるように気象だと思います。静岡が特に減ったように見えるのは、前年非常に多かったのも気象条件の影響だろうと思いますけれども、それで前年と比較すると逆の動きが大きく見えるということになっております。

○弘岡委員　村山先生、気象なのでしょうか。静岡の花粉の量は東京にすごく影響するというようなことをおっしゃっていたように思うのですけれども、静岡がすごく今年は少な

いということは。

○村山委員　少ないというのは、前の年に比べて少ないというだけで。

○弘岡委員　少なくはない。

○村山委員　はい。過去１０年の平均とほぼ同じなので、影響はかなり残ると思います。静岡がこういう変化をしているのは、実は２０１５年がかなり少なくて、そこで気象条件がよかったものですから、翌年２０１６年がものすごく多くなったんですね。やはりものすごく多くなると、多少気象条件がよくても花自体が減りますので。極端に減っているわけではなくて、見た目には前年の４割という数値になっちゃうんですけれども、過去１０年の平均と一緒なので、決して少ないというわけではありません。ここ３年ぐらいは静岡と関東が多い少ないがちょっとうまく連動していないのですけれども、それ以前は大体連動していたのが、ここでちょっと変なふうに見えるだけだと思います。

○弘岡委員　わかりました。

○村田会長　よろしいですか。

　どうぞ、大久保委員。

○大久保委員　予測のほうはまずほぼほぼいいと思うのですけれども、佐橋先生にお聞きしたいのは、雄花の重さが多分３０％変わるということで花粉量が３０％変わるのかというとそうじゃないわけですよね。でも、かなり重さのばらつきは出てきますよね。目視で見るのはもう約の数と量で、何ｍｇまではわからないわけですけれども、実際に先生が調査しているのはもっと細かい部分だろうと思うんですね。これの増減というのは何によるのですかね、この３０％重さが変わってくるというのは。結構大きいのかな、１０ｍｇというか、そのぐらいは変わってしまうので。

○佐橋委員　まず、雄花の成長段階ですけれども、早いときは７月の初めから肉眼で見えるぐらいにできます。成長する段階で先端のほうから次々に雄花ができてくるのですが、それがちょうどある時期に例えば７月の中旬に３０℃あって、その次の週に２５℃に仮に落ちた場合、つまり気温の変動が激しいと、せっかく雄花ができても気温が低くなったときに成長がおくれてしまうわけですね。今年の場合は８月に入って成長が確かに遅くなっていることはわかるので雄花の大きさにばらつきが結構目につくんです。

　前に申し上げましたけれども、できるだけ雄花の大きく見栄えのいい枝をとるんです。だから、そういう意味ではその木の平均ではなくて、できるだけ大きいのをとってしまっているということです。

○大久保委員　かなり雄花自身の個々のバリエーションはすごくあるんだなというのが一つと……。

○佐橋委員　あります。

○大久保委員　その個々のバリエーションがどの平均なのかと、それと着花量によって大体の雄花の中の花粉量というのは多分想定ができているのがほとんど今の状況だろうと思うんですね、目視をいろいろな地域でやっていますので。ただやはり最近は、個々の変動はあったとしても大きさはほぼ一定と考えていいんですね。

○佐橋委員　平均すればそうかと思います。小さい、大きいはありますけれども。

○大久保委員　昔お話を聞いたときには、今年は雄花が全部大きくて、しかもたくさんついていますと言われればもうたくさんだなというのがすごくわかったのですけれども、最近は何かそこがちょっと微妙に全部平均化してきているなというイメージでここ数年間は捉えているのですけど。

○佐橋委員　確かに成長ぐあいは木によっても違いますし、それからシーズン中に気温が急に変動したりしますと雄花の成長も遅くなったり早くなったりしますので、ばらつきが結構目立つ傾向にあります。

○大久保委員　最近はそうですね。

○村田会長　ちょっと関連して私のほうからも。

　先ほど事務局から資料１の説明がありましたけれども、この中に④と⑦の観測地点のコメントとして「ここ数年、木に勢いがない」、それから「かつての木の勢いがなく、傷んだ木や異常な雄花が目につく」と。こういうことで、評価が下がるかなと思ったら評価は高い、変わりない。先ほど大久保委員がおっしゃったように、佐橋先生は表２の下に「各地点から原則として１本の精鋭樹」ですか、元気のいいのを選んだということだったものですから、やはりこれは平均的な見方をしないと、全体の花粉飛散というのは平均的な数値で出てくると思うんですね。その辺どうでしょうか。それから将来、こういう勢いがないような木がどんどん増えてくれば、どうなんでしょうね。

○佐橋委員　もちろん減っていくと思います。私は林業関係ではないので横山委員に聞いてほしいのですが、恐らくここずっと見てきて、道路拡張などで最近伐採が多く、ここ数年内でもう何カ所かは木の観察場所を変えなくてはならないぐらいの木の樹勢が余りよくないところがあります。

○村田会長　何だか自然界というのは難しいですね。

○大久保委員　難しい。だんだん本当に最近は成長していくのと落ちていく木が両方まじってきているので、大体均一化してきちゃっているのかなという、昔の１０年前とは全く違う様相なのかなと思います。

○弘岡委員　木の勢いがないというのがいま一つわからないのですけれども、雄花をいっぱいつけていないという意味ではなくて、年とっているとか何か年代とかそういうことなのでしょうか。傷ついているという文字もありますけれども、勢いがないという内容は何なのでしょうか。

○佐橋委員　横山委員に御願いします。

○横山委員　この場所自体がそもそも余りスギの生育に適する場所でなくなってきているわけですね、昔に比べると。

○弘岡委員　日が当たらないとか、そういうことですか。

○横山委員　というより、人間の影響ですね。道路の拡張とか枝を切られるとか、ほかの影響で調査地点としては余りよくなくなってきているというところです。勢いがないと見えるのは、枝の葉っぱが少なくなったりとか、伸び方が少なくなったりとか、そういうことからの印象です。

○弘岡委員　樹齢とは余り関係なくて。

○横山委員　樹齢とは関係ないですね。

○弘岡委員　スギはもう１００年とか２００年とかどんどん生きるわけですが。

○横山委員　長いこと生きますから、寿命的には。

○弘岡委員　ありがとうございます。

○村田会長　ほかに何かございませんか。

○西端委員　資料２の今の２ページと３ページのところですけれども、今樹齢の話が出ましたけれども、佐橋先生も３０年以上されているわけですよね。３０年たつとスギの木は花粉をすごく飛ばすようになるという話を聞いたことがあるのですが、そうすると最初のころと最後のころで、樹齢３０年に満たない木が含まれているとかそういうようなことはあるのですか、林として。

○佐橋委員　同じ木をずっと３０年見てきたわけではなくて、例えば小机などでは、最初のころはまだ若い木が多くて、枝をとって花芽の調査をしていたのですけれども、だんだん成長してしまい手が届かなくなって、それで花がとれなくなったということで目視だけになってしまったということです。

たしか横山委員、種を植えて３０年でほぼそうなるんですよね。

○横山委員　３０年でほぼいっぱいになるというのは、スギ林として見た場合ですね。１本ごとのスギの木で考えたのと違って、スギ林の状態で増えていくのが１０数年ぐらいから増えて３０年、４０年ぐらいでほぼピークになって、その後は余り大きな変動なく５０年、１００年といくと。というのは、スギ林としてのことであって、１本の木で見ますと、木が大きくなれば当然花粉の量はふえるということです。

○西端委員　ありがとうございます。もう１つはその隣の表３ですけれども、秋のときに村山委員からお話があったのですけれども、八王子と東京の比率が平成１４年以前のを見ると平成３年が千代田より八王子のほうが少ないですけれども、それ以外は全部八王子が多いですよね。最近の３年は千代田と八王子は余り差がなくなっていますよね。原因はともかくとして、これを何か補正する必要はないのでしょうか。

○佐橋委員　実はそれで頭を痛めているのですが、例えば静岡とか房総とかから都心に入り込んでくる飛散のルートですね、それが変わってしまったのか。というのは、千葉では船橋ばかりではなく佐倉、富里もほぼ同じようにかなり飛散が連動して増えています。その半面、東京湾あたりとか横浜ではさほどでもないということがあります。以前たしか村山委員からどうも花粉飛散の流れのルートが変わっている可能性もあるというようなことをちょっとお聞きしたのですが、村山委員、コメントありますか。

○村山委員　まず補正は必要ないと思います。というのは、この間ちょっとお話ししたような道路の影響とかそういうものがあるのですけれども、これが逆に千葉とか神奈川から入ってくる場合にはその影響というのはほとんどないんですね。奥多摩からの分は減るけれども、だからそのときの気象条件がどっちが優性になるかで変わってくるので、下手に補正すると、何だ多いじゃないかという結果にもなりかねないのと、その補正する根拠というのが科学的にきちんと検証されたものであればいいのですけれども、そうでなくて大体こんなものだろうというので補正するのはかえってよくないと思うので、予測の方式をずっと同じ方式でやっていくと。あと２～３年こんな状況が続けば平均値そのものが変わってくるので、これは予測にだんだん反映されていくんですね。本来、昔の条件でやれば多分八王子の予測は１万幾つというような数字になると思うのですけれども、実際にはその分がもう８，０００個、せいぜい多くて８，０００個ぐらいのレベルにだんだん年々調整されているので、変な補正はやらないほうがいいと思います。

○村田会長　よろしゅうございますか。何かほかに。

いつもこの１月の会のときに臨床の先生方がもう既に患者さんが出ているよというようなことをお話しなさっていますけれども、今シーズンはいかがですか。

○大久保委員　まだ、花粉症の人がちょっと症状が出ましたというのは風が強いときぐらいの話で、症状的には痒みのみだろうと思います。痒みはほとんどドライアイでも起こりますし、ドライノーズ、あるいは花粉も多少は入ってきているけれども、佐橋先生のお話でも１日１個飛ぶぐらいはあったということなので、風が強い日はもう仕方がないのかなと。

○村田会長　例年どおりだということですね。

○大久保委員　例年どおりだと思います。

○弘岡委員　私は、今年は少し早いかなと思って、結構１月にもう完全に花粉が来ましたという人が例年より多いような気がしていますけれども、西端先生、どうでしょう。

○西端委員　確かにもう花粉症が始まったと来てくださる方はいるのですけれども、大久保先生がおっしゃるように今年寒かったので、乾燥とかそういうのが半分ぐらい。それでも９日でしたかね、あの暖かかった日ぐらいに港区では、遠藤先生のところではスギ花粉が観測されていて、その後は症状が出てきた人が何人かいましたので、もう反応している人はあると思います。ただ、極端に早いかどうかはわからない、早目かなという感じはありますけれども、そんなにすごく早いという感じではまだないかなと思うのですけれども。

○大久保委員　これからの気象条件が全てなんじゃないですかね、やはり。

○西端委員　今日なんかちょっと怪しいですかね、暖かいし。

○大久保委員　そうですね、少し飛んでいる可能性はあるんですね。でも、やはり雨が降っていると……。

○村田会長　今日、明日はちょっと暖かくて、また寒くなるのでしょう。そういう影響というのはどうなんですか。

○村山委員　多分今日は飛ぶとすれば午後からというか、昨夜から雨降ったので花が濡れているから開花するという条件ではないんですね。今年の特徴は、１つは湿度が低いんですね。気温が低いというより湿度が低いほうが多分芽とか花には影響が大きいので。去年の眼科学会で頼まれた角膜ヘルペスの発症と気象の関係を調べたら、目からの蒸発量が多い湿度単純よりも、風があるとか湿度が低いとか温度によって蒸発量が変わりますから、それでやるとかなり４分の３ぐらいの人がそういう日にはあるかなと。多分花粉症も鼻とかそういうところからの蒸発量が多いと悪くなる可能性はあります。気象条件的にはそう

いう粘膜が乾きやすいという条件です、今年の１月は。

○大久保委員　もともと何を花粉症と言うかが一番難しくて、花粉症の人が乾燥でも発症したら花粉症の症状なんですけれども、実は花粉が入っていなくても花粉症の症状は出るんです。それは乾燥でももちろん出ますがね。何を見ているのかだけはっきりしておけばいいのかなということは。

○西端委員　確かに難しいですね。

○大久保委員　難しいです、すごく生理学的な条件なのと花粉が来たときの免疫反応とは全く別ではないのですけれども、どっちもありだし、相加的に悪くなるので、それは現象として花粉が飛んでいる、飛んでいない、我々の体に入ってきて何が起こるかというのと、乾燥で何が起きるのか。それは患者さんにとっては一緒なので、出ましたと言ったら、それはああ出たんですねと言うしかないかなといつも考えてお話をしています。

○井上委員　インフルエンザも乾燥したときには症状が重いのでしょうか。

○大久保委員　インフルエンザも多分そうだと思うのですけれども、基本的には今はもうとるのは全部上咽頭でとっていますから、ウイルスを口あけて待っている人はいないので、全部上咽頭、咽頭扁桃で免疫反応が起こるとすると、その咽頭扁桃も乾燥していればやはりそれだけ直接ダメージがあるので、多分ウイルスは侵入しやすいと考えます。ですから、インフルエンザの検査をしていても、出血するときと全く出血しないとき、粘液層だけとれているときというのは出血しないので、乾燥している人はもうすぐ出血します。やはりそうなってくるとインフルエンザも乾燥している今年みたいな状況は確かにはやっていますし、インフルエンザのワクチンも足りなかったので余計発症していますから、今すごいです。インフルエンザのほうが猛威だと。

○井上委員　マスクはしたほうがいいですね。

○大久保委員　そうですね。マスクで自分の息で湿度を保つというのがベストだと思います。

○村田会長　ちょっと今度はインフルエンザの話になっちゃいましたけれども、非常に気象がいろいろ影響するということは確かであるということはわかっていますけれども、それが果たして花粉のほうにも、またいろいろな疾患に対しても気象条件が関与するということで、特に花粉は前年の気象条件も絡んできますし、年末の気象条件等も絡むということです。

　人間というのはどうもいい加減だなと思ったのは、僕は今年は非常に寒いなと思ったん

ですよね。どうも村山さんのお話だと何か平年並みだよということでしょう。何か随分寒いんじゃないですか。

○村山委員　人間というのはだんだん慣れてくるので、暖冬が多くなると体がそっちになってくるんですね。どうしても昔より着るものも薄手で軽いものになってきていて、これで普通の冬になるとすごく寒く感じるんですよ。こういう状態が何年か続くと、この程度の寒さだったらまあこんなものかと思うようになるのですけれども。

○村田会長　ありがとうございました。いろいろ参考にしたいと思います。

ほかに何かございませんか、いろいろ御質問、御意見。

なければ次に入ります。

オ　スギ・ヒノキ花粉飛散予測のまとめ

○村田会長　オの「スギ・ヒノキ花粉飛散予測のまとめ」ということで、これは事務局が、これまでのいろいろ御説明いただいたものを既にまとめてつくってあります。そういうことですから、事務局から説明していただきます。

○小林健康危機管理情報課環境情報担当主任　では、資料５につきまして私のほうから説明させていただきます。「スギ・ヒノキ花粉飛散予測のまとめ」になります。

まず１番ですけれども、各調査手法によるスギ・ヒノキ花粉の飛散予測ということで、こちらにまとめてあります。まず表１ですが、こちらは今解説していただきました佐橋委員と横山委員と村山委員の各予測をこの表にまとめております。この下の図１ですけれども、こちらはこの表１をグラフの形で表したものになります。

ページをめくっていただきまして、２番になりますけれども、予測幅の検討になります。こちらの表２ですけれども、これは予測いただいたものを基に調整しまして、予測のＤという形で出しております。また、予測Ｄの±１５％をとりまして、それぞれ上限値と下限値を出しております。こちらを基にしましてグラフにしたものが、この図２になります。

では次のページに移りまして、３番、スギ・ヒノキ飛散花粉数予測のまとめになります。まず表３ですけれども、こちらは都で行っております測定ポイント、１２ポイントになるのですけれども、そちらと東京都全体の飛散の予測を載せております。また、昨年の平成２９年の飛散花粉数と過去１０年の飛散花粉数を載せているのがこの表３になります。また、この下の図３になりますけれども、こちらは過去１０年の東京都全体で飛んだ平均値

をグラフで表したものと、この春の平成３０年の予測のものを載せたグラフになります。東京都の今度の平成３０年の予測値ですけれども、東京都全体の平均は、５，３００～７，２００という予測値となっております。こちらの数字ですが、昨年の飛散数に比べますと１．６倍～２．２倍、また過去１０年平均と比べますと１．０倍～１．３倍に当たる数字となっております。

では次のページに移りまして、図４になります。こちらは飛散花粉数の経年変化をグラフで表したものになっております。グラフの中に黒い折れ線であらわしているものが過去１０年平均になります。こちらは始まりが平成６年から出ておりまして、直近のものが平成２９年のデータを出したものになっているのですが、この平成６年と重複のものと比べますと、平成６年時点のものが大体２，２８０ぐらいの数値になっておりまして、直近のものが５，５３２ということで、この間、大体２倍以上に増えているという結果となっております。

次に４番になります。飛散花粉数が多い日の予測についてになります。こちらですけれども、まず飛散花粉が多い日というのは、ダーラム法で測定されたものが１ｃｍ^{2}当たり３０個以上観測された日というものを多い日としております。

この予測ですけれども、都の平均としましては４１日という予測となっております。これは、昨春の３２日、また過去１０年平均で見ますと３１日になりますので、そちらと比べますとおよそ１０日程度多くなる見込みということになっております。

次に５番目、飛散開始日の予測についてです。こちらは東京都全体のものになりますけれども、予測日としましては２月１０日～１４日という予測になっております。こちらの過去１０年平均は２月１６日なのですが、こちらに比べるとやや早目になる見込みとなっております。

また、毎年と同じですけれども、２月の初めごろに再度飛散開始の予測を行いますので、こちらは東京都のホームページで公表する予定になっております。

資料５の説明に関しましては以上になります。

○村田会長　ありがとうございました。ただいま事務局で、３委員の予測を基にまとめたものということになります。それぞれ３委員の各観測点の数値をもとに予測Ｄを計算したんですね。これは平均ですね、言ってみれば。

○小林健康危機管理情報課環境情報担当主任　そうですね。

○村田会長　そして、さらにそれの±１５％ということで下限と上限の値を決定されたと

いうことになります。こういう形で今年の春の予測というのが表３に出ています区部平均とか多摩平均、あるいは都全体での平均という形で出てきますので、これがどちらかというと都民の方々にお知らせする数値かなと思います。

そういうことで、こういうまとめでよろしゅうございますか、どうでしょう。

○井上委員　表３のところで、区部平均と多摩平均とあります。区部平均のほうはこれで良いかと思いますが、多摩だと例えば青梅と小平は非常に差があります。これを平均して意義があるのかどうか、多摩平均を出す必要はないのではないか。

都平均はずっと前からやっているので、過去を比較するためにこれは必要かなと思います。

それから表４で飛散花粉が多い日の予測で、都平均では４１日となっています、区部では３９日です。この情報を見ている人では、区部の情報を知りたい人が圧倒的に多いと思います。そういう人は、八王子、青梅を含む都平均のことは余り関係ないと思うのではないか。この都平均というのはあまり意義が無い気がするのですが。

○村田会長　いかがでしたか。星山委員、どうぞ。

○星山委員　今のことではないのですけれども、井上先生の続きではなくてよろしいですか。

○村田会長　どうぞ。

○星山委員　何というのかな、僕がこれを見たときに過去１０年間では４番目ぐらいに多く飛ぶ年になるかもしれないわけですよね、３０年は。

○大久保委員　ここ１０年では３番目か４番目。

○星山委員　そう、ここ１０年では３番目ぐらいに多く飛ぶと、去年に比べて２倍ぐらい飛ぶと。これは大変なことだというニュアンスを入れたほうが、私は対策をとるのにはちょっとそういうニュアンスを入れたほうが、過去３番目に多くて去年の倍も飛びますよということで対策していただくほうがみんな気をつけるのではないかなという印象を持ったのですけれども。

○村田会長　先生、今のこのまとめは、委員のデータをもとにまとめたものであって、これをどう解釈して都民に広報するか、これはまたちょっと別のレベルになります。

○星山委員　わかりました。

○大久保委員　実際、本当に多摩のここを見ると多摩平均、区部平均というのは、余り区と多摩を区別するというのは東京都としていいのかなというのを逆に思うので、都平均だ

けでいいのではないですかね。多い日も３９日と４１日、４２日とこの数字に意味が余りもうないような気がするんですね。

○村田会長　昔は多摩格差と言って、区部と多摩との差が。

○大久保委員　いや、余りそういう格差というか、本当これだけバリエーションも多摩の場合多いですから。

○村田会長　ここのところ余り多摩の中でもね、差がなくなってきたんですよ。

○大久保委員　だから、それは地域を見ればいいだけで、多摩と一緒くたに、多摩という言葉を使うこと自身が、区部と多摩というのはいいんですかね。というのがちょっとした確かに疑問で、これだけバリエーションが多い、本当に井上先生がおっしゃるように。

○井上委員　この行政区域で変わるというのも何か変な話ですね。

○大久保委員　というのがやはりあれで、もう個々としていろいろなところを移動、東京の人は移動しますけれども、実際は各地域のものがこれだけ出ていれば都平均でいいのではないかなという気がしますけれども。

○井上委員　何年か前に、静岡の花粉の影響が区部のほうにあって、多摩は余り関係ない、との話があった。そんなところから区部と多摩と分けたほうがいいのではないかとの議論が出てきたと思います。

○大久保委員　昔は圧倒的に八王子が多かったときは多分その議論は成立したのですけれども、何か八王子がだんだん区部の数に近づいていって、それは村山先生がさっきお話ししたとおり、交通網がそれだけ変わってきて道路が遮断されてくると変わるのかなということであると、明らかに多摩と区部を分ける理由というのが存在しない。都民にとっての情報として存在し得るのかどうかというのを考えたほうがいいのかなという気がします。

○星山委員　だから、本当に純粋に統計学で言えば平均値が代表値になるのは正規分布するときだけなんですよね。ですからこの場合、正規分布していないのでそういう印象を先生は持たれたのだと思うので、平均を使うのがいいのか、最頻値を使うのがいいか、中央値を使うのがいいのかというのは一回検討したほうがいいのかもしれませんよね、非常に偏りのあるデータなので。

○村田会長　ちょっとこの行政区域の問題が絡んでくると……。何か人間の関係であればなんでしょうけれども、どうも自然現象というものがそういうことに馴染むかどうかということなんですよね。

○大久保委員　だから、都の平均が過去１０年間で全部比較してきているので、これは必

要ですよね。

○村田会長　それはいいですよね。数値としてはこれは出してあっていいと思いますよね。ですから、こういう今みたいな意見が出てくる訳だからね。だから、これは先ほど言ったように、都民にお知らせする場合に区部と多摩と分けて示したほうがどういうふうに受け取るかということがあると思うけどね。それはまた次のところでやればいいと思います。とにかくまとめとしては、予測値はこの数値でよろしいですか。この判断、それと幅ですね、予測をこういう形で出してあると。特に問題はないですね。――はい。

　では、まとめそのものはこれで委員会のまとめとしていいのではないでしょうか。いかがですか。

○井上委員　先ほどの区部平均と多摩平均というのを別々に出さなくてもいいような気もするのです。

○村田会長　ありがとうございました。ほかに何か御意見はございませんか、よろしいですか。特に予測をされたお三方の方々はよろしゅうございますか。

○村山委員　私は今までどおりで。急に変えると何で変えたんだという話になって、ここだけ変えてもらっても三多摩格差残るので、このままでいいと思います。

○村田会長　では、まとめはこれでまいります。よろしゅうございますね。――はい。

　どうもありがとうございました。

　では、資料は事務局が説明したとおりで了承ということにいたします。

（２）その他

○村田会長　では、議事のほうは（２）その他というのがございますので、これをちょっと事務局から説明していただけますか。よろしいですか。

○高橋健康危機管理情報課課長代理　事務局の高橋でございます。私のほうからは来年度の花粉症対策事業の変更点につきましてご説明させていただきます。

　まず、今まで都のほうで行ってきました自動測定予報システムにつきましては、「とうきょう花粉ネット」において情報提供させていただいておりましたが、今シーズンの春、平成３０年５月までで終了の予定で検討しております。

　また、「東京都アレルギー情報ｎａｖｉ.」というのを昨年４月から開設しておりますので、平成３０年度中にダーラム法による花粉の測定結果を当センターのホームページから、

そちらに移行させて、より総合的な花粉症対策の情報提供を行っていくことを検討しております。

お手元の「花粉症一口メモ」の２４ページ、２５ページにちょっと簡単ではございますが、東京都の花粉情報のサイトとアレルギー情報ｎａｖｉ．のサイトの説明が掲載されておりますので、御参考にしていただければと思います。

どうぞ御理解、御協力のほどよろしくお願いいたします。

以上です。

○村田会長　ありがとうございました。

それでは、これで事務局のほうの説明が終わりましたので、今まで今日のことを通して御意見等がございましたら御発言をいただきたいと思いますが、いかがでございますか。あるいは今の事務局の報告についても何か御質問があればお伺いしたいと思いますが、いかがですか。よろしゅうございますか。

今日の予定は２時から４時となっておりますが、順調というのか何と言ったらいいのかわかりませんが、まだ３時１３分ぐらいのところで随分時間が残っておりますので、何か御発言があれば、ぜひ。

○村山委員　ちょっと花粉数の経年変化のグラフ、まとめのところを見ていただきたいのですけれども、ここでは表現が「平成６年時点に比べて２倍以上に増えています」といってこの図をぽんと出されると、このままたどんどんふえるのかなというイメージになってしまうのですが、これは移動平均をつくってみるとよくわかるので、これ５年移動だともっとはっきり出ますけれども、増えていたのは平成の初期から平成２０年ぐらいまでであって、その後はずっと横ばいなんですね。これだけ毎年気象条件が変動しているのにもう横ばいということは、実は花粉数がこれ以上増加しないかもしれないと。はっきり言えば、この後移動平均ずらしていくとあと数年たつと平成２３年の１万５，０００個というのが消えるから実はこれは下がるというふうにね。

先ほど樹齢の話が出ましたけれども、今、関東でも日本全体でもスギはもうほぼ９９％が樹齢３０年を超えています。ヒノキも９５％ぐらいが樹齢３０年超えて、花粉の生産量自体はもう完全に数年前からピークになっちゃっているんですね。だから、この後気象条件で変動はしますけれども、今までのように直線的にふえるということは多分なくなるのではないかと。多分今までの、はっきり言うとこの山というのは実はこういうふうに見えるんですよ、右のほうで下がっているように。都の平均で１万５，０００個を超えるよう

な年というのは、この後出てくるかどうかわからない。それは、１つは極端な冷夏というものがなくなってしまったので、極端な冷夏があって翌年猛暑になるとこういう大飛散になるのですけれども、最近それがなくなってしまったので、本当狭い範囲で変動しているだけ、大体３，０００個～６，０００個ぐらいの幅でこのまま推移していくというような格好になると思います。はっきり言えば、多い状態がこのままずっと続くというような形になってくるのだろうと考えています。

○井上委員　５年平均のほうがいいですよね。

○村山委員　５年平均のほうがもっとはっきり出ます。５年移動平均を使うことが多いのですけれども。

○村田会長　５年平均だと過去の高い値は皆消えちゃうものね。

○村山委員　消えちゃうから何か下がっているように見えますけど。

○村田会長　ありがとうございました。何かほかにも御意見があれば、ぜひ今後の花粉観測の参考になるかと思いますし、まとめにでも参考にしていただければと思います。だから、まとめの段階で、今まで１０年平均出しているけれども、５年平均も出すとかやってみる、比較してみるとおもしろいんじゃないですか。

○井上委員　花粉症実態調査報告書に関する意見でもいいですか。

○村田会長　いいですよ。実態調査のことで。

○井上委員　そこに花粉症患者有病率が４０数％という数字が出ています。前回の調査のときにも、今年１月の委員会でもちょっと議論になったと思うのですが、過大評価がされていると思います。確かにこの調査は３０年前から同じ手法でやっていますが、住民の関心というのは、近年、患者の自分自身の花粉症に対する関心は高まっている一方で、患者でない人は花粉症への無関心度がむしろ高まっているかもしれない。個人的な行動様式が時代とともにどんどん強まっているので、花粉症患者でない人はアンケート調査に回答しないのではないか。一方、回答する人は関心を持っていて、無料でＩｇＥ抗体の検査をしてもらえる。そういうことで、症状を持っている人が集まってきて、症状のない人は来なくなっているかもしれない。有病率が増えていることは間違いないでしょうが、実際以上の値がここに出ているのではないかと思うのです。そのことが報告書の「考察」に入っていない。すでに公表されたものですけれども、「考察」に入れるべきだった。前回１０年前のときもこの議論はありました。以上です。

○村田会長　はい。

○星山委員　回収率はどれくらいあったんですか。――６割ぐらい。そうすると４割の人は分かれている。井上先生の説で言えば、その４割の中には花粉症なくて興味がないからやめちゃったと、そういうことですね。それはもう非常にあり得るということですね。

○井上委員　それが昔より今のほうがより強まっていると。

　それから、ＩｇＥ抗体保有率が８０％です。本当に一般住民の８割もＩｇＥ抗体を持っているか疑問です。患者が相対的に多数集まれば当然８割にはなります。全く無作為に選んで無理やりに調べることは無理ですが、そういうディスカッションぐらいはあったほうがいいのかなと思います。

○村田会長　いろいろ意見があるかと思いますので、その辺は参考にして今後やっていただきたいと思います。

○星山委員　狭い地域でもいいから全数調査を企画したほうがいいですよね。何かの調査のときに調べるというのはあるんだよね。

○村田会長　難しいと思うけれども、いいんじゃないですか。では、参考にしてください。

　ほかに何かございますか。

○星山委員　済みません、ちょっと追加して。東京都の職員の人は必ずこの調査に答えるようにとかそういう圧力をかけられないですか。都の職員やればかなり全数に近い回収率９０％ぐらいいくんじゃないですかね。

○大久保委員　個人情報なので今はだめなんです、それをやっちゃ。倫理委員会をちゃんと通さないとアンケートはとれないです。パワハラになってしまうので。

○村田会長　血液などはいろいろあると思いますよね。例えば健診なんかでやっているわけですから、そういう血液を使ってというのはあるけれども、それはできないでしょう。

○大久保委員　いや、それは向こうから来る場合はいいのですけれども、こっちから出せというのはまずいということだね。

○村田会長　いろいろ問題、個人情報みたいなところがあるから、身体情報だものね、個人の。勝手にやるわけにいかないものね。

○大久保委員　健診のときのアンケートとかなんですよね。

○星山委員　でも、匿名化されていれば倫理委員会は通っちゃうんじゃないですかね。

○大久保委員　いや、個人情報なのでどうやって利用するかとかそれを、健診の場合は個人にバックするからいいんですけど、それをデータとして集めるとなると、それの公表方法とかそういうものも全部書かないと難しいんですよ。それを握って誰かが昔出していた

ので、それがもう医学的には問題なんです。だから、集めた情報をどう使うかというのを前もって決めておかないとだめで、それをみんなでこれが正しいかどうかというのが倫理委員会の審査が必要になります。

○星山委員　国民生活基礎調査の中に花粉症の質問を１問入れてもらうとか。

○大久保委員　だからもっと大きな組織が、例えば日本とかそういう大きな組織がやる分には、国民にこうやりますよと、このデータはみんなの情報ですよというのであればいいと思うんですよ。ですけれども、今のここの段階でそれをやる東京都を動かすとすると、それは東京都の人からの反対があると。もしあった場合には反論できない。

○村田会長　ありがとうございました。

○川上委員　済みません、大久保先生がいらしている前で言うのもあれなんですけれども、アレルギーの診断はとても難しいと思うんですね。季節に症状があるからこれは間違いなく花粉症だろうと思って検査をしても陰性であったり、でも耳鼻科の先生に鼻粘膜を診ていただくとやはりアレルギー性鼻炎と言われて帰ってきたりということで、とてもこのあたりは診断が難しいので、有病率の評価も実は何をもってデータを出すかということで大きく数字が変わっちゃうと思うんです。だから、そういう意味では、余り数字としての有病率という形でそこをひとり歩きさせないほうが、こういう問題はいいと思うんですね。やはりかなり都民の中にいるんだという事実もこちらが把握して、東京都としての何らかの施策を考える上でのデータとするのはいいですけれども、都民に対して、あなたたちはこんなにアレルギーの人がたくさんいるのだから、みんなで徹底的にマスクしましょうみたいな、そういうことにはつながっていかないと思います。

　それと一緒に、はっきり言ってアレルギー性鼻炎は人にうつるわけでもないですし、個人の問題としての健康上の問題ということになるので、その人がその症状に対して苦痛を覚えるならばこういうデータをうまく活用して自分のクオリティー・オブ・ライフを少しでもよくするように努力しましょうねというための情報提供にはなるけれども、これが絶対視されてひとり歩きして、じゃ花粉症と一度でも言われたことのある人は、花粉の飛ぶシーズンは外に行っちゃいけないとか、マスクをしなければいけないとか、ゴーグルをするのだったら本当に花粉が入らないようなゴーグルをしなければだめですよみたいなことでもないので、そういう意味で、せっかく出しているデータではあるけれども、でもそれはインフルエンザの調査とかとは全然意味合いが違って、本当にこれは困る人はどうぞこういう東京都が出したデータを上手に活用してくださいねというレベルの話だと思うんで

す。

だから、それだけに有病率何％であるというところを重視する必要もないし、先ほど区部と多摩部というような話が出ましたけれども、多摩部といってこれだけデータに開きがあるものを十把一からげに言うことは余り意味がなくて、それぞれの人が自分の居住地の近辺はどうなのかなと具体的に見られることのほうがずっと意味のあるデータとして都民にお返しできる形になるのではないかと思います。しかもこれは、ちょっと統計学は私も詳しくないのですけれども、予測値で幅があるものをさらに平均を出すというのは、予測のさらに平均で二重に「たられば」をかけていくようなものなので、余り予測値での平均で、しかも広域的なまとめをするというのは、逆にデータとしての意味が脆弱化してしまうのではないかなと思います。

○村田会長　ありがとうございました。貴重な御意見いただきました。そういうことで、今後の……、はい、どうぞ。

○大久保委員　いいですか。この調査自身がもともと東京慈恵医科大学でずっと花粉症をやっている先生方が続けていった同じ手法なので、数値を見るよりも、増えているということを実感していただくだけで、４０％いるとは誰も思わないと思うんですよね。ですから、同じ手法でやって、たまたま東京都はいつもオーバーエスティメーションに出ているということを理解していただければ。

たまたまそれが４０％まできて、今度次回やったら本当に６０％になったらどうしますかという話になる訳ですよ。だから、それはあくまでも増えているということで、川上先生がおっしゃったように、もうこれが増えているというだけで、４０％が問題なのではないという理解をしていただいたほうがいいと思います。だから、やはり変にマスコミとかにおもしろおかしく東京都だけこんなに突出しているんですよと言われちゃうほうがまずいかなという気はしています。

○高橋健康危機管理情報課課長代理　そうですね、今回そういったこともやはり議論の中で出ましたので、セルフケアで抑えられている人も含んだ４８．８％ということでプレス発表はさせていただいております。うちのほうも大分その数値的な増加というのはかなり議論があった部分ではありました。

○西端委員　９月のときには発表したのですけれども、やはり３０年間、症状を発症して受診してくる方といろいろな花粉のデータを比較するとすごく相関するんですね。ですから、やはりそれを見てちゃんと本人がセルフケアをきちんとやっていただけるためにはこ

のデータはすごく重要だと思うので、どういう形で出すかというのは慎重に考えないといけないかなと思います。

○村田会長　ありがとうございました。いろいろと御意見、ありがとうございます。それ以外にも何かございますか。

なければ、私の進行はこれで終わりにしたいと思いますので、事務局にお返しします。どうぞよろしくお願いします。

○秋場健康危機管理情報課長　本日はちょっと予想しないような宿題もたくさん、ありがとうございました。

村田会長、どうもありがとうございました。

３　閉　　会

○秋場健康危機管理情報課長　本日御審議いただいた東京都のスギ・ヒノキ花粉飛散予測につきましては、本日この後プレス発表を行いたいと考えております。

なお、この後事務連絡がございますので、委員の先生方はこの場にお残りいただきたいと思います。

皆様、本日はお忙しい中、長時間にわたり貴重な御意見などをいただき、ありがとうございました。

これをもちまして、東京都花粉症対策検討委員会を終了させていただきます。ありがとうございました。

午後３時２８分　閉会